あらすじ

ヤマタノオロチに、若い生娘を生贄に捧げることで生き延びていた村々があった太古の日本が舞台。

ハツ、リンはヤマタノオロチの住む山の洞穴で、生贄の順番待ちをしていた。そこに、もちがやってくる。もちはハツやリンとは違う村の出身で良いところの娘。なかなか会話がかみ合わずイライラするハツとリン。

生娘が条件であるはずが、リンは田吾作という大仏顔の男に夜這いをかけられ、喪失。呆れるハツに、実はもちも同じ田吾作に夜這いをかけられていたことがわかる。しかも田吾作のあそこのサイズがなめこと同じだということでリンともちは意気投合。

その時、ヤマタノオロチから一人ずつ、洞穴の中に入ってくるよう言われるが、田吾作が現れ、ヤマタノオロチを退治してしまう。そして腹が減ったという3人に、田吾作は実家のなめこ汁を振る舞うと言って話は終わる。

人物

ハツ（18）　盗賊（生娘）
リン（18）　ハツの仲間（盗賊ではない）
もち（16）　隣町の娘
ヤマタノオロチ（421）　ヘビ
田吾作（21）　村の男
ねね（31）　もちの母親

遠くで、太鼓がどんどんと打ち鳴らされる音。
洞穴からは、びゅーびゅーと風の吹く音がする。
もち「お、おっかさん。おっかさん」
ねね「堪忍な、堪忍な」
もち「おっかさん。おっかさん」
ねね「村のためじゃ。村のためなんじゃ」
ねねの声が遠ざかっていく。
もち「おっかさん。おっかさーん」
もち、シクシク泣いている。
太鼓の音が止まる。
洞内から響く風の音が止む。
もち、まだシクシクと泣いている。
近づいてくる２つの足音、足音が止まる。
ハツ「あー、うるさいね」
リン「あれ？見たことない顔」
ハツ「なんか、ぱっとしないのが来たね」
もち「だ、誰？誰です？」

ハツ「アンタと立場は一緒さ」
リン「もしかして隣村のヤツかな」
ハツ「そうに決まってんだろ。ウチの村、
　もう若いの残ってないんだからさ」
リン「おぉ」
ハツ「何に対する「おぉ」？」
リン「なんかさ、すごくない？」
ハツ「何がすごいのさ？」
もち「あなた達は何者なんですか？」
ハツ・リン「あ、あなた達」
ハツ「あなた達と来たよ」
リン「あんたんトコ、家、金もってんね。ま、
　もう関係ねぇけどさ。べー、だ」
もち「私は、む、村のために来たんです。村
　を守るために、い、い、生贄になりに」
ハツ「ま、一緒だって。だから」
もち「あなた達も？」
ハツ「あぁ。だからさ、背中かゆくなっから
　やめてくんない？そういう言い方」
リン「ほんと。吐きそ。げぼぉ」

もち「じゃあ、なんてお呼びすれば？」
ハツ・リン「お、お呼びすれば？」
ハツ「マジでクソだね。コイツ」
リン「ほんと。最悪だわ」
ハツ「マジ無理。生理的に無理」
リン「ほんと無理。セーリ的に」
ハツ「怒りすら沸いてきたよ」
リン「わても」
ハツ「わて？」
リン「わて」
ハツ「それはやりすぎじゃない？」
リン「え？なんで？」
ハツ「それはイキりすぎでしょ」
リン「いいじゃん。新入りに舐められたくないし」
ハツ「まぁ、わからなくはないけど、ウソはやめようや」
リン「ウソじゃねぇし。ずっと呼んでたし」
ハツ「いやいや、１８年の付き合いで初耳ですけどね」

リン「心の中で呼んでた」
ハツ「は？心の中？そいつは素晴らしいや」
リン「ほら。ほら。ほらぁ」
ハツ「なんかむかつくな」
リン「ウソじゃなかったっしょ」
ハツ「うるせぇ」
　ハツがリンの頭を拳でたたく音。
リン「いったぁ。何すんだよ」
ハツ「てめぇの胸に聞いてみな」
リン「綺麗なままで死にたいんだよ」
ハツ「じゃあ、ウソつくな」
リン「ウソじゃねぇってんだよ」
もち「あの…」
ハツ・リン「なんだよ」
もち「怖くないんですか？」
ハツ「何が？」
もち「これから、ヘビに食べられるんですよ。
　私たち」
ハツ「あぁ。そうだね」
リン「ヘビじゃねぇし。ヤマタノオロチだし」

もち「私、それ、考えただけで震えが止まらなくって」
ハツ「大丈夫だって」
リン「そうそう」
ハツ「先に行った奴ら、悲鳴さえあげてないから」
リン「そうそう。毒の息で眠らされて、そのままごっくん。気づいたらあの世行きってわけさ」
ハツ「オロチ様も大変だ」
リン「なんでよ。働かないで食えるなんて最高じゃん」
ハツ「たぶん、普通に食ってた時もあったんだろうけどさ、アンタみたいのがいて、泣きわめいたんじゃないの」
リン「オハツも騒ぐっしょ。絶対」
ハツ「アタシは騒がんよ。絶対」
リン「うわ。なんかむかつく」
ハツ「ていうかさ、お互い、名乗ってなくない？」

リン「は？アンタがハツで私がリンっしょ。
忘れたの？」
ハツ「ちげぇし。あちらさんだよ」
リン「あ。確かに。アンタ名前は。名前あん
だろ」
もち「…もちです」
ハツ・リン「は？」
ハツ「声ちっさ」
リン「もっとはっきり言え。はっきり」
もち「もちです」
ハツ・リン「もちぃ？」
ハツ「あの、神棚に並んでるやつ？」
リン「あの、正月に食うやつ？」
ハツ「醤油つけて食うやつ？」
リン「あたいは黄な粉だな」
ハツ「今はそっちに流れるのはやめよう」
リン「なんでよ。うーん。黄な粉だけでもい
いから食いたい」
ハツ「なんでもち？」
もち「おもちのようにかわいいからって」

ハツ「はぁ？」
リン「黄な粉、どっかに落ちてないかな」
ハツ「ありえないね。アンタの親。もしかしていっぱい兄弟いた？」
もち「いません。一人娘です」
リン「黄な粉、黄な粉」
ハツ「うるさいねさっきから黄な粉黄な粉って」
リン「だってぇ、死ぬ前に食いたいじゃないか。てめぇの好きなもん」
ハツ「無理に決まってんだろ。ここにゃ、枯草一つ生えてないだろうが」
リン「さっき、トカゲ食ったじゃんか」
もち「と、とかげ？」
ハツ「あぁ。上手いよ。普通に」
リン「かば焼きと一緒。かば焼き、食ったことないけど」
ハツ「アタシはあるよ」
リン「どうせ盗んだんだろ」
ハツ「そりゃそうさ。それがあたいの稼業だ

かんね」
リン「犯罪のくせに偉そうに」
ハツ「アンタ、時々、まっとうなこと言うね」
もち「軽蔑します。あなた方のこと」
ハツ「お好きにどうぞ。どうせすぐ死ぬんだ。関係ないね」
リン「ま、綺麗なまま死ねるだけありがたいわいや」
ハツ「村に残っても、人生決まってたしね」
リン「農家の嫁になんか死んでもなりたくねぇし」
ハツ「生娘のまま死にたいやね」
リン「ん？あ、あぁ、そうだね。そう」
ハツ「ん？」
リン「いや、そうだねって言っただけ」
ハツ「あんた、捨てた？」
リン「何を？」
ハツ「御託は良いから答えな」
リン「仕方ないだろ。強引に来られたんだから」

ハツ「いやいや、生娘が条件でしょ。コレ」
リン「バレやしないよ」
ハツ「いや、バレなきゃいいわけじゃないっしょ」
リン「いやいや、アンタにだけは言われたくないね」
ハツ「相手は？」
リン「あぁ。まぁ、隣の隣の村の田吾作」
ハツ「え？あの大仏面」
リン「好きもんなんだよ。アレ」
ハツ「あ、あんた、あんなのと」
リン「だからぁ、寝てるとこ無理矢理だっての。だって気付かなかったぐれぇだし。マジで。ほんと、ちっせぇからさ。ちっせぇくせに謎に自信家で」
ハツ「ま、まつたけくらい？」
リン「はい？」
ハツ「いや、だからサイズ感の話よ」
リン「まつたけなんてないない」
ハツ「じゃあシイタケくらい？」

リン「シイタケ？ありえないありえない」
ハツ「じゃあ何さ」
リン「なめこ」
ハツ「なめこ」
リン「そ。ぬめぬめしてるだけ。柔いし」
ハツ「食ったら美味いじゃないか」
リン「おえ。今、そういう話じゃないっしょ」
ハツ「はん。呆れたもんだね」
リン「なんか、全部聞きだしてからそのセリフはずるくない？」
ハツ「最低だよアンタは。ちなみに、アンタは大丈夫そうだね」
もち「確かに、なめこだったかも」
ハツ・リン「は？」
リン「もしかして、アンタもやられた口かい？」
もち「え、えぇ」
リン「お仲間お仲間。こんなとこで会うなんてねぇ」
ハツ「はぁ、呆れたよ」

リン「いや、せめてソコは持つもん持っとけよって感じだよな。やり方がやり方なんだからさ」
もち「えへへへへ」
ハツ「あー、いやだいやだ」
リン「あれ、もしかして羨ましい？」
ハツ「羨ましいもんか。あんな大仏面と。あんたまで人を見下す目すんじゃないよ」
もち「別に私は何も」
ハツ「はん。目見りゃわかんだよこっちは」
リン「ハツが強すぎるから、田吾作も行かなかったんでない？」
ハツ「あんなの、こっちから願い下げだよ」
ヤマタノオロチ「静かにおし」
洞窟の洞穴からずりずりと巨体を床にこすらせる音。
ヤマタノオロチ「一人ずつ、この穴から入っておいで。逃げようとするんじゃないよ。逃げたら、アンタたちの村は焼き尽くしてやるからね」

床にこすらせる音が遠ざかっていく。
リン「だ、誰が行く？」
ハツ「やだよ。最初は」
リン「でも、あんたが一番に来たんじゃないか」
ハツ「じゃんけん」
もち「私も嫌です」
リン「どうせ死ぬんだぜ。みんな」
ハツ「逃げよっかな」
リン「村が終わるけど」
ハツ「いいよ。どうでも」
リン「最低だよアンタ」
ハツ「もともと根無し草さ」
リン「でも、村の連中はアンタを仲間だと思って色々助けてくれたじゃないか」
ハツ「はん。有難迷惑だよ」
もち「やっぱり、私が行きます」
リン「は？」
もち「なんか、最後は嫌だし。真ん中も嫌だし」

リン「勝手に決めんな」
走って近づいてくる足音。
田吾作「ちょ、ちょっと待った」
リン「あ、あんた？田吾作じゃないか」
田吾作「俺が、退治してくる」
リン「バ、バカ言うんじゃないよ」
田吾作「この剣はな、伝説の剣なんだ」
リン「バカ。どこの闇市で買ったんだよ」
田吾作「マジさ。見てろ。な、もちちゃん」
もち「こっちを見ないで」
田吾作「そ、そんなぁ。よーし、気を取り直して行ってくる」
田吾作の足音が洞窟の中へ消えていく。
リン「あぁ。殺されるぞアイツ」
もち「はい」
洞窟の奥から田吾作とヤマタノオロチの声。
田吾作「覚悟しろ」
ヤマタノオロチ「なんだオマエは」
田吾作「俺は、村を守る戦士だ」

ヤマタノオロチ「ぎゃぉおおおお」
田吾作「くらえぇ。化け物」
剣が硬い硬いうろこに当たる音。
ヤマタノオロチが炎を吐く音。
田吾作「ぐ、ぐわぁあぁ」
ヤマタノオロチ「死ねぇえぇ」
田吾作「ちぇすとぉおおー」
ヤマタノオロチ「ぎょええええええ」
洞窟の奥から音がしなくなる。
リン「あれ？どうなった？」
ハツ「田吾作が死んだんだろ」
もち「はい。死んだかと」
洞窟の奥から、足を引きずりながら出てくる音。
田吾作「倒したよ。ヤマタノオロチ」
リン「ま、マジ？」
田吾作「あぁ。もう大丈夫だ。村に帰ろう」
ハツ「す、すげぇ」
田吾作「もちちゃんも、帰ろう」
もち「は、はい」

田吾作「良かった。やっと目見て笑ってくれた」
もち「ありがとう。田吾作さん」
リン「なんか、腹減った。ハツ、あんたは？」
ハツ「うん。腹減った。もち、あんたは？」
もち「お腹、空きました」
リン・ハツ「お腹」
田吾作「よし。じゃあ俺ん家、来いよ。おっかぁが上手いもんこしらえてっから」
ハツ「かば焼きか？」
リン「黄な粉のかかったもちか」
もち「お刺身が良い。タイ」
田吾作「俺ん家って言ったら、なめこ汁っしょ」
ハツ・リン・もち「なめこ汁」
田吾作「あぁ。最高よ。俺ん家のなめこ汁」
ハツ・リン・もち「なめこ汁、大好きぃ」
田吾作「そうだろそうだろ。さ、行こうや」
ハツ・リン・もち「はーい」
遠ざかっていく４人の足音。〈了〉